

現状と課題

## 平安時代の対外関係史と仏教

— 入唐僧・入宋僧研究から見た現状と課題 —

手島崇裕

## 一 はじめに——対外関係史研究における「仏教」

## 1 中世仏教成立史研究からの提言

本稿は、遣唐使廃絶以後の平安時代対外関係史分野を扱うが、仏教（僧侶）を軸に通覧するものとなる。そこでまず、同時期の日本仏教史研究に目を向ける。

黒田俊雄氏の顕密体制論提唱により、古代的な旧仏教の衰退過程としてではなく、中世仏教の形成過程として、平安時代の仏教史の展開も捉えられるようになった〔黒田 一九七五〕。同論においては、対外的視角からの十分な議論を伴わない点が問題とされてきたが、近年、中世仏教の成立過程を、背景となる国際環境のなかに意識的・意欲的に捉えようとする研究が進みつつある。行論にも関わる内容であり、簡単に紹介したい。

上川通夫氏は、十二世紀第一四半期過ぎ頃、東アジア世界の再々編（北宋・遼の滅亡、金と南宋の並存等）を背景に、政策的に顕密一対の中世仏教が成立したという。それは、北

宋・遼仏教の新傾向を参照し選択導入しつつ、中国仏教とは似て非なる独自の内実を持つ擬似汎東アジア的仏教だという。その前史たる撰定期仏教においても、既に古代仏教に特徴的な中国仏教の敷き写し（模倣再現）方針を転回させ、大陸仏教の意図的アレンジや参照がなされていたという〔上川二〇〇六a・同b・二〇〇七a〕。

横内裕人氏は、日本仏教のあり様を顕密八宗の観念を軸に捉え、渡海僧侶等の伝える大陸情報によって中国仏教（教理・宗派）とのズレを客観視しつつ日本仏教の自己認識が深まる過程を論じる〔横内 二〇〇八b〕。また、上川氏の擬似汎東アジア的仏教という概念について、「日本のみならず、宋・遼・高麗仏教にも適応されるべきものなのか否か」が検討されるべきだとする〔横内 二〇〇八c〕。基準としての汎東アジア仏教そのものが流動的であること、比較史的視点を導入することの重要性を教えられる。

西氏の研究では対外関係史研究に十全の目配りがなされるが、さらに上川氏は、平安時代の仏教史の諸要素は国家外交

そのもの一部であつて、仏教史や仏教史史料を外交史や外交史料としても捉えるべきことを提言している〔上川二〇〇六b・二〇〇八c〕。対外関係史研究にとつて、「仏教」の参照が不可欠の課題とされているのである。

## 2 対外関係史研究における仏教史への着目

さて、対外関係史の近年の研究進展は目覚ましい(研究史の整理としては「榎本渉 二〇〇七a」がある)が、仏教史分野への意識的な着目もはじまっている。榎本渉氏は、十二世紀後半以降についてはあるが、「川添昭二 一九八七」・「西尾賢隆 二〇〇二」等を受け、対外関係史史料として僧侶の詩文・墨蹟等の仏教関係史料を用いる重要性を指摘している〔榎本二〇〇七a・二〇〇八〕。また、山内晋次氏は、「日野開三郎 一九八四」・「川添昭二 一九八八」・「藤田明良 二〇〇〇」等の先行研究も踏まえ、海商の仏教信仰が海域ネットワークを支える可能性を推測する。そして平安期の「仏教史と貿易史を総合的・構造的にとらえる論理・視角」を探る必要性を提言している〔山内 二〇〇三〕。このような指摘・提言を踏まえ、具体的な研究が進められるべき時期にあるようだ。

上川氏や横内氏の研究に明らかのように、遣唐使廃絶後にあつても、日本仏教の成長・展開は必然的に大陸との直接・間接の接点を保ち続ける。そして、浸透の度合いや実態的機能こそ多様だが、対外関係史研究の対象となる当該期東アジア各国・地域は多く「仏教」なる宗教を共有する(ように見

える)。貿易面のみならず、国家間外交や地域間交流のあり様を規定し推進する一原動力である。各々の場面で「仏教」が如何なる役割を果たしているのか、仏教史研究からの提言も受けとめ、多様な角度から分析を進める必要がある。

## 3 東アジア世界における「仏教」

以上を受けて、西嶋定生氏の冊封体制論・東アジア世界論〔西嶋 一九八三a・同b〕に触れたい(1)。西嶋の想定する固有の世界においては、受容・共有される要素として漢字・儒教・律令制等に加え仏教が挙げられる。仏教が重視されることに對し、小幡みちる氏は、唐代、国教化した道教が冊封関係を補充するものとして唐の国際秩序形成に果たした役割を論じている〔小幡 二〇〇三〕。だが実は西嶋以降の研究史において、仏教そのものが、中国より導入されるべき対象として自明のものとされ、複数の国家・地域間を取り持つ外交上の、あるいは国際秩序形成上の機能についても等閑視されがちであつたと思われる。

ここで、河上麻由子氏の研究が注目される。中国南北朝時代、中国へ周辺諸国が奉った仏教色の強い上表文に着目し、仏教を中心理念とする国際関係の構築があつたことを指摘する〔河上 二〇〇八b〕。また、遣隋使・遣唐使時代の仏教と外交(朝貢)の連関も論じ〔河上 二〇〇八a・二〇一〇〕、仏教の国際関係史上の機能については、隋・唐以降の時代についても検討を加えるべき問題だと展望する〔河上二〇〇六〕。

仮にそれが王化思想や礼・儒教的世界秩序を補完する次元の些細な存在であったとしても、仏教について、中国王朝と周辺諸国との多様な関係を取り結ぶツールとしての機能や役割を考究していく必要があるといえよう。ただし一方で、そのツールとしての「仏教」の土台・基準となるであろう中国仏教と、周辺諸国・地域が時々々に奉じた仏教との差異や各々の史的展開にも自覚的であらねばなるまい。

#### 4 渡海僧侶に焦点を絞る意義

平安時代対外関係史研究に、どのように「仏教」ないし仏教史研究をおり込むか、正面から議論すべき研究現状にあることが確認できた。ただし、仏教関係諸分野について、当該問題関心に連なる研究を俯瞰的に見通す能力は筆者にはない。本稿では、渡海僧侶（入唐僧・入宋僧）に焦点を絞り、その一端を伺いうる研究・論題を取り上げたい。僧侶も社会を構成する一分子であり、その属性は決して東アジア世界に通時的・普遍的なものではなく、それを産み出す国家・文化圏の性質に規定されるものである。彼等の移動・往来は、各国家・地域間の「仏教」の特質を比較の見地から見極めるきっかけとなる。同時に、対外関係の諸側面に実際に関わる彼等仏僧の動向を追うことは、東アジア世界の史的構造との緊張関係を保ちつつ、「仏教」の役割を具体的かつ多角的に論じる手がかりになると思われる。

以上を踏まえ、対外関係と仏教との有機的連関を考究するうえで重要と思われるいくつかの論題について、従来の渡海

僧研究史を確認・紹介しつつ、見過ごされてきた問題点や今後の検討課題を具体的にあまり出さず試みる。なお、上述の研究現状に鑑み、参照すべき関連分野・研究史については、対外関係を視野に入れた専論でなくとも積極的に行いたい。

#### 二 「入宋巡礼僧」以前の渡海僧を巡る問題

##### 1 求法僧から巡礼僧へ

通例、入唐僧・入宋僧については、遣唐使時代の国家仏教に資するための求法僧から、自己の罪障消滅・後生菩提を目的とする聖地巡礼僧になったと捉えられる〔木宮泰彦 一九五五〕。森克己氏は、皇族貴族層の支援に注目して、「入宋巡礼僧達は貴族社会の宗教的贖罪代表として入宋した」とする〔森克己 一九七五〕。これらを受けて、石井正敏氏は各入宋僧（齋然・寂照・成尋）や前後の渡海僧をも視野に入れ、背景貴族社会との繋がりを具体的に明らかにし、彼らを迎える宋側の姿勢や対外政策との関係についても精緻に考究する〔石井 一九九三〕。以上を確認したうえで、遣唐使廃絶後から「入宋巡礼僧」に至る時期の論点を確認したい。

##### 2 僧侶の中国聖地「巡礼」に見られる積極的側面

円仁等を載せた事実上の最後の遣唐使（承和五年（八三三）入唐）と同時期、遣唐使船に付随しない形式での入唐僧の活動がはじまる。惠尊の数度に渡る入唐（初度は八四一年）である。遣使事業から離れた新しい対外交流の形を支え

たのが、九世紀以後発達する海商（新羅十唐・吳越商人、後に宋商人）・商船のネットワークであり、近年研究が進んでいることを、行論の前提として押さえておきたい〔田中史生 二〇〇六 a・二〇〇七〕・〔山崎覚士 二〇〇七〕・〔榎本渉 二〇〇七 b〕。

「求法僧」の枠に収まらない惠尊の入唐活動の中身について、近年分析が進む〔佐伯有清 一九九二〕・〔保立道久 二〇〇四 a〕・〔田中史生 二〇〇六 b・二〇〇九〕。ここでは、日本王権内部（具体的には嵯峨天皇皇后仁明天皇母の橘嘉智子の名が知られる）の意を受けたと思われる惠尊の中国聖地巡礼に関して触れたい。

惠尊は初度の渡海で短期間に天台山・五臺山を巡礼し帰国したが、次の渡海時には五臺山送供使として再度五臺山を目指した。田中史生氏は、五臺山に「日本国院」を建立し「国の芳名を遠流」することが目的と伺える史料を挙げ、日本王権の計画的支援があったとする〔田中 二〇〇六 b・二〇〇九〕。

この巡礼活動の意義を理解するためには、唐代の五臺山信仰に関する史的研究を参照する必要がある。近年、唐の代宗・僧不空と五臺山文殊菩薩信仰との関係性が注目されている〔岩崎日出男 二〇〇三〕・〔中田美絵 二〇〇九〕。中田氏は文殊菩薩と金輪聖王たる代宗とを五臺山金閣寺修築事業等を介して結ぶ王権イデオロギーの創出が不空によってなされたとする。所謂小五臺山信仰が九世紀以来、国内外（日本も含む）に広まることは早くから指摘されてきたが〔小笠原

宣秀 一九四〇〕・〔金井徳幸 一九七四〕・〔山本謙治 一九九一〕・〔孫昌盛 一九九七〕、中田氏は五臺山文殊信仰と結びついた仏教的王権イデオロギーが一つの雛形としてユーラシア大陸諸地域に波及していった可能性を指摘する。

以上から、五臺山信仰は、中国における仏教と内政との連関の度合いを確認する一指標であると同時に、仏教を介した周辺諸国との関係を理解する際の手がかりといえよう。従来も、惠尊等僧侶を入唐させた皇族貴族層の意思については、王権内部での政争等内政状況とも連関するものと展望されてきたが〔保立道久 二〇〇四 a〕・〔田中史生 二〇〇六 b〕、僧侶を中国聖地へ送り込む積極的意義については必ずしも明確化されてこなかった。今後は、中国聖地（五臺山に加え天台山や泗州僧伽大師所縁の地等）が日本や周辺諸国の王権・支配層に対して持つ吸引力の中身にも留意しつつ、巡礼の「公」的側面や積極的側面を分析する必要があるだろう。

### 3 日延の吳越国渡海を巡る問題

五代十国時代には、求法とともに五臺山巡礼を目指した寛建（九二七年渡海）もいるが（さしあたり〔王勇 二〇〇〇〕〔参照〕）、ここでは吳越国へ渡った日延に触れたい。

吳越国が、五代王朝の冊封下でありながら、高麗・日本等に対して積極的に独自の国際秩序構築に動いたことが近年山崎覚士氏によって明らかにされている〔山崎 二〇〇一・二〇〇二〕。並行して、仏教を介した対外交流がなされていた点（散逸した天台經典を高麗・日本に求め、高麗へは僧侶の

派遣もなされた)に注意したい。「西岡虎之助 一九八四a」・「盛沙雅章 二〇〇〇」(2)。正式な国家間通交は事実上拒絶した。「石上英一 一九八二」・「保立道久 二〇〇四b」・日本からも、呉越国側からの吸引姿勢に應じる形で僧日延が渡海した。「竹内理三 一九五五」・「桃裕行 一九九〇」・「平林盛得 二〇〇一b」。仏僧・仏典の往還は文化交流の一駒としてつとに注目される事例であるが、そこに込められた呉越国側の政治外交上の意図や日本側の対峙姿勢が今後問われるべき問題となる。即ち、日延には、王との謁見や賜紫衣・賜大師号といった前代には見られない「厚遇」があり、その帰国が歓迎されつつも、「在唐之間日記」について真偽を諮問されてもいる(3)。ここには、後続の入宋僧裔然に通じる側面が垣間見られる。日延の事績は、裔然の入宋前の動向(例えば、『本朝文粹』巻十三所収「裔然上人入唐時為母修善願文」)に見られる、自身の入宋が一僧侶の個人的な巡礼行であることを敢えて公言するといった下準備等)を考える前提として捉え直す必要がある。

### 三 中国仏教の展開の特質

#### 1 対外関係史研究との関連において

##### 1 北宋の仏教事業と対外戦略

僧侶を通じた対外交渉を考える際、彼等を迎える側である中国仏教の内実や歴史的展開の特徴について、どのような側面を参照していく必要があるだろうか。中国仏教史研究について、敢えて紙幅を割きたい。

まず、北宋の国家主導の仏教事業推進について。先行研究によると、それは建国し統一から初期の、宋中心の新たな国際関係構築時に特徴的とされる。北宋はインドとの通交を積極的に進め、輸入梵文経典の中国語への翻訳(訳経)事業を一五〇余年ぶりに再開させたが、その大蔵経への入蔵と最新の技術に基づく版本大蔵経の作成事業は、版本を周辺諸国へ賜与することで、アジアの新盟主たる自国文化を内外に誇示し、外交関係を進展させる宋朝の対外戦略を担うものもなったという「塚本俊孝 一九七五」・「牧田諦亮 一九七六・一九八四」・「上川通夫 二〇〇七b」・「王丁 二〇〇八」。なおこの側面は、仏教事業の一つの核たる訳経事業が最後の輝きを放ったとされる神宗朝頃までは「藤善真澄 二〇〇六b」、その国政に占める重要度こそ次第に低下したとしても、かろうじて引き継がれたと認めてよいであろう。

日本―北宋関係を論じる際には、版本大蔵経に代表される仏教文物を利用した外交進展策が、モノに込められた宋朝の政治的意図をも含め、まず意識されるべきものとなる。

#### 2 宋代に至る中国仏教の展開―対外関係史研究の前提として

仏教と対外戦略の結びつきは、その時々の中国王権の個性や仏教への距離・依存度によって左右されよう。だが同時に、長期的視点から見た中国仏教史における仏教の国家ないし王権への従属過程とその特質をも考慮せねばなるまい。ここで、藤善真澄氏は、隋唐代の度僧制を貢奉・制挙等官

人登用法(科挙)に比擬し、五代、宋初における紫衣・師号獲得のための試験整備も視野に入れ、「度僧―受戒―紫衣・師号の階梯」が確立し、「隋唐以後、僧徒の官僚化」内の官僚化が進行し、宋代に及んで完成した」とする「藤善一九七五」。僧侶の「臣僧」という自称の問題等も踏まえて西尾賢隆氏が整理するように、宋代以後を官僚的仏教と規定しえよう【西尾 二〇〇六】。

唐宋変革期を経た宋代には、周辺諸国とは逆に脱国家仏教の動きが見てとれ、儒教・朱子学に基づく社会体制が確立するが【林淳 一九九五】・【平雅行 二〇〇六】、反面でそれは、中国における仏教の皇帝権威への従属完成でもある点を同時に押さえておくことが必要となろう。僧団を第二の世俗(皇帝に奉仕する官僚集団)として体制内に完全に取り込み、仏教に対して王権が完全に上位置に立つ関係となりゆく過程に、日本も対峙した北宋の対外戦略が存在する。ひとたび仏教が対外戦略に用いられれば、そこに表出する皇帝権威性は、前代になく強い外圧(ないし吸引力)を周辺諸国に感じさせたのではないか。

### 3 周辺諸国僧への宋皇帝の「厚遇」について

【中村菊之進 一九七七】・【黄敏枝 一九八九】・【顧吉辰 一九九三】・【上川通夫 二〇〇七c】等が収集した西域・インド方面からの僧侶入宋の事例を通覧すると、梵経や仏舎利等を齎した僧侶に対して、正規の朝貢をはじめ何らかの公的役割を担うか否かにかかわらず、多く皇帝謁見と賜紫衣と

いった「厚遇」がなされている。僧侶を俗人同等に使節として扱いうる(「官僚化」に端的に示される)ことを前提とした、周辺諸国からの入宋僧侶群への賜紫(や進んで賜大師号)は、右に見た僧侶の階梯秩序への組み込みとも看做しうるのであり、仏教を通じて皇帝権威の周辺諸国への広がりを独善的手段ではあるが内外に標榜するものとなっている。

なお、紫衣・師号を積極的に得ようとする動きが、入宋僧・使者側に確認される事例もある(『宋会要輯稿』蕃夷五(西南蕃) 天聖四年(一〇二六) 九月条・『統資治通鑑長編』元豐二年(一〇七九) 八月丁巳条等)。北宋仏教の持つ魅力・吸引力が、大蔵経等のモノの枠にとどまらない可能性を今後考慮するべきであろう。

### 4 聖地巡礼の管理・統制

先述の五臺山に対する諸国僧の巡礼(や他国からの供養使派遣)は北宋期に隆盛を見たようだ(『宋史』・『宋会要輯稿』・『統資治通鑑長編』・『參天台五臺山記』等に事例が散見される)。当代に特徴的と思われるのが、外国からの五臺山巡礼は、多く皇帝の謁見を経て皇帝の恩恵として許可され、路次保護による開封―五臺山往還がなされることであろう。必ずしも北宋期だけに限られるものではないが、唐代、惠萼や円仁(他には宗叡等)が皇帝との縁なく比較的簡単に五臺山巡礼をなしたとことと比較したとき、北宋期における五臺山巡礼の管理・統制は重視されるべきであろう。

日本僧戒覚が宋で提出した表で「遠方異俗が来朝入覲し、

聖跡名山を巡礼するのは恒例である」〔渡宋記〕元豊五年（一〇八二）十月二日条」と述べたのについて、巡礼の便宜を得るための謁見を求めた発言で、公使としての入観を求めたものではない点が先行研究では重視される「石井正敏 一九九三」。だが、そもそも巡礼の便宜を得るためには皇帝謁見が必要、という認識が十一世紀末の周辺諸国に共有されるに至っていた点に、まず注意を払う必要がある。

従来の日宋関係史研究ではあまり顧みられることのなかった北宋仏教の諸特徴を確認したうえで、改めて入宋僧を巡る諸研究や論点を紹介し、今後の課題を探っていききたい。

#### 四 入宋僧を巡る諸論点と今後の検討課題

##### 1 入宋僧の公使的側面を巡って

入宋僧の性格を巡って争点となってきたのは、彼等に付された公的な役割やその「公」の内実である。石上英一氏は、宋を盟主とする新たな東アジア世界秩序へ参加するべく、「僧侶の朝覲」という国際的な形式による冊封関係に入らない形態での従属的な通交関係の樹立」を日本政府は意図したとする。さらに、北宋への最初の入宋僧喬然の入宋朝覲が「一〇世紀末以降の日宋関係の基調をつくり出した」と展望する「石上 一九八二」。

日本政府が入宋僧を積極的に准公使として送り出したという見方に対し、例えば村井章介氏は入宋僧の渡海動機を個人的なものとして、喬然の入宋を遣唐使と決定的に異なるとした。なお村井氏は、摂関家が私的権門の立場から宋の文物や

情報を得るためには、世俗の秩序から相対的に自由な僧侶の手を借りることが不可欠だったとする「村井 一九八七」。また、「石井正敏 一九九三」・「河内春人 二〇〇四」等も、僧侶派遣に日本側の外交上の積極性を見ることには否定的である。

だが、ここで問題視したいのは、僧侶が外交関係や国際秩序面から比較的・相対的に遠い存在という前提で議論がなされていることである。入宋僧に正規使節同等の朝見・朝辞儀礼が適用されたのも、あくまで遣唐使以来絶えている正規の朝貢使節を引き出すための厚遇と看做されている「石井 一九九三」。以上は日本史研究における議論だが、一方中国史の立場からは、宋代には周辺諸国から実際に僧侶が朝貢使節として来朝していたことから、日本僧も朝貢使節のものと処遇されたとの見方もある「藤善真澄 二〇〇六d」。また、具体的に成尋について、五臺山で供養すべき故後冷泉天皇書写經典を携行した点に公的側面を付与され、宋朝から日本王権の内命を受けた公使と看做されたとも論じられる「遠藤隆俊 二〇〇二・二〇〇六」。前章を念頭に置けば、宋朝が対外戦略面で仏教に重きを置いている限りは、僧侶は俗人と区別なく同等の入貢使たりうるし、巡礼そのものが公共性の高い来朝目的とされるうちは、朝貢使節とは看做しえない僧侶であっても、聖地供養の公使としての処遇がなされたと考ええてよからう。入宋僧の帯びる「公」的側面を論じる際には、僧侶の方外の士たる属性について自明視せず、日宋双方の対外姿勢と仏教との連関の度合いによる、僧侶認識の差を意識

した議論が必要と思われる。

なお、今後検討されるべき具体的論点にも触れたい。齋然  
は帰国入京した翌年、弟子嘉因等を再び渡宋させたが、その  
許可を朝廷に申請する奏状で、再渡海を目的を五臺山文殊普  
薩供養と新訳經典入手としている〔平安遺文〕四五七五号〕。  
齋然は自身の入宋時に五臺山巡礼を果たした。だが、奏状で  
は「一万文殊之真容」を供養する宿願を未だ遂げていないと  
述べる。矛盾するかのような発言だが、奥健夫氏は、太宗が  
太平興国五年（九八〇）に命じた、五臺山での金銅文殊万菩  
薩像造立事業（『仏祖統紀』卷四三）と、齋然の宿願の遺餘  
との関連性を推測し、齋然が同事業への参加を願ったとする  
〔奥二〇〇九〕。確かに関連する事項かもしれず、宋朝側か  
らすれば、齋然が有した、皇族貴族層とも共有したであろう  
五臺山供養の宿願に着目し、初度入宋時にはその宿願を完遂  
させず、再来朝と引き換えに皇帝主導の仏教事業を通じた結  
縁供養を約束（ないし要請）していた可能性も考えられるの  
ではないか。

## 2 齋然に関する論点―北宋勅版大蔵經

齋然については、版本大蔵經等の仏教関連文物の請来につ  
いて研究が盛んである（4）。近年上川通夫氏によって、版本  
大蔵經の日本国内における政治的役割が推測されている  
（5）。天仁三年（一一一〇）白河院の供養した法勝寺一切經  
は、齋然請来版本を底本に書写された撰闕家の大蔵經を底本  
とすることで宋版本の權威的価値に連なるとともに、紺紙金

泥という独自の莊嚴方法を持つ。同事業遂行者である院に  
は、内外に向け自らを国政主導者と位置づける狙いがあった  
とする。これ以後も国内自前の版本は作られず、汎東アジア  
性を象徴する刊本の系譜を引いた書写本の価値づけが続くこ  
とが、日本中世仏教の疑似汎東アジア性の特徴だという〔上  
川二〇〇八b〕。他方、齋然請来大蔵經の刊・印記を保存  
する現存書写經典の調査から、法勝寺一切經（や撰闕家書写  
經）の底本の全てが齋然請来版本系統になるとは考え難いと  
し、版本の一括形式に權威性を見出して書写一切經の「一梓  
」と考えることへの反論も出されており〔牧野和夫二〇〇  
九〕、今後の議論進展が期待される。

なお、版本形式の大蔵經を介した日中交流はむしろ平安末  
以降（鎌倉時代）に盛んとなる（関連研究等については「大  
塚紀弘二〇一〇」を参照）。ただしこの場合は、私見によ  
れば、民間開板になるものを、日本側から（時に補刻まで行  
い）固有の価値を付与しつつ積極的に輸入されたと思しい。  
これに対し、皇帝下賜の形で輸入された北宋勅版の帯びた權  
威的価値とは如何なるものだったのか（6）、著名な清涼寺現  
藏釈迦如来像等の他請来文物ともども（周辺諸国への下賜文  
物との比較も踏まえ）、さらに検討していく必要がある。

## 3 寂照、成尋、戒覚について

後統の入宋僧（寂照・成尋・戒覚）については、從僧が帰  
国することはあるが、一団の長は宋で没することとなった。  
さらに、成尋・戒覚の出国は明らかに密航（7）である。「不

帰・「密航」という共通の特徴は、奮然時の北宋皇帝との交渉を経験した平安期朝廷や僧侶当人の判断による。以下、各僧特有の論点にも最低限言及したい。

まず寂照について。その入宋行が説話にも採られることから(8) 著名な僧侶であり、基礎史料を網羅した「久曾神昇

一九五九」・「西岡虎之助 一九八四b」等の研究がある。また、「平林盛得 二〇〇一a・同c」は入宋直前期における寂照周辺の人間関係や、出家入道―得度と入宋申請との連関を論じており、入宋時の社会的立場、身分にも配慮すべきことを教えられる。また、入宋後の寂照については「藤善真澄 一九九六・二〇〇六a・同c」に詳しい。さて、宋地での寂照師弟には、皇帝膝下開封を拠点に天台山・五臺山巡礼を果たした時期と、朝辞後、江南の地に下るも帰国せず蘇州・杭州・明州・天台山等の地に留まった時期があるように、必ずしも注目されてこなかった前後者の差については今後留意するべきではないか。

上川通夫氏は、宋への政治的従属に繋がる懸念から、北宋皇帝膝下(北地)の仏教を避けた、藤原道長主導による江南方面との選択的通航(天台宗・浄土教重視)策があったとする「上川 二〇〇七b」。北宋仏教を一つのものと自明視せず、地域差と政治外交問題とを関連づける新たな視点として評価できるが、同じ時期、朝辞し相対的に皇帝權威から離れつつも帰国しなかつた寂照の宋国内での動きもまた、同策と連動し、それを支えるものではなかつたか。寂照―摂関家の活動については、寂照弟子念教の一時帰国・再渡宋時、宋天

台山へ施物供養した藤原道長に「東アジアの国際秩序の下で自己を位置づける」意思を見る見解がある「保立道久二〇〇四b」。その当否等は、道長の江南への選択的着目と、その独善的な意思標榜を支える寂照の宋国内での位置取りがあったことを前提としたうえで議論を深める必要がある。

続く成尋については、その在宋日記『參天台五臺山記』関連の研究が近年特に進む。「齊藤圓眞 一九九七・二〇〇六・二〇一〇」・「衣川強 二〇〇五―〇九」・「藤善真澄 二〇〇七」の各訳注が継続中であり、また、テキスト(東福寺本)の校訂活字化が新たになされている「森公章 二〇〇九」・「王麗萍 二〇〇九」。その入宋・在宋時の史的動向を探るための研究も急増している(9)。本稿の立場から付言するなら、『參天台五臺山記』に見られる(そして他史料では具体的には何いえない)入宋インド僧(中天竺国僧・丈夫国僧等)の在宋時の動向や、宋の僧侶の社会的位置を詳細に検討することで、日本僧の入宋を相対視する手がかりが得られるように思う。

なお、後統の戒覚も在宋日記『渡宋記』を残し、その抄出本が伝わる「小野勝年 一九七三」・「橋本義彦 一九九六」・「森克己 二〇〇九」。彼は有力後援者層との繋がりが何えず、その意味ではまさに私的な巡礼僧であつて、先行入宋僧と必ずしも同列には論じられない。ただし、皇帝謁見を経ての五臺山巡礼許可に与つており、その出自や人的背景に拠らない宋側の日本僧への処遇方針の一貫性が同日記によつて知られる等、『渡宋記』は貴重な情報源である。

戒寛以後、入宋日本僧は八十年以上見られなくなるが、代わって十一世紀後半以降の東アジア海域世界には、高麗を中心とした仏教交流が確認できる。章を改めて触れたい。

## 五 高麗・遼仏教との接点と比較

### 1 義天版を中心とする研究史上の課題

義天（一〇五五—一一〇一）が宋・遼（や日本）から章疏を蒐集し開板した所謂統藏經（義天版）を中心とする高麗仏教と日本仏教との接触の諸相については、遼・日本の関係とともに近年横内裕人氏が従来の研究史を明快にまとめている〔横内 二〇〇八c〕。詳細はそちらを参照されたい。

横内氏の整理する論点のうちで特に注目したいのは、統藏經の輸入から国内流通に至る人的ネットワークが具体的に明らかになりつつある点である〔堀池春峰 一九八〇〕・〔宇都宮啓吾 二〇〇二〕・〔横内 二〇〇八a・二〇一〇〕。即ち、院・仁和寺御室を頂点とした南都・真言宗学僧（ただし天台僧も含むと思われる）の法縁・俗縁の繋がりにある。東大寺僧覚樹や興福寺僧円憲といった義天版輸入の主体は、自ら大宰府まで下向することもあり、大宰府長官や府管内国司との俗縁も見出される等、海域ネットワーク（10）に直接繋がっていたという。では、入宋僧断絶期に對外ルートを確認し、所屬宗派・寺院の枠を超えて義天版を輸入・流布・研究した学僧・遷世僧達のまとまりは、日本仏教界全体において如何なる位置を占めるものか。後の鎌倉期において、顕密仏教が、禅宗等新来の中国江南仏教移入をどのような形で許容

し、それと棲み分けていくか、という大問題を考える際の前提としてもその位置づけは重要となろう。

なお、宋への入貢再開（一〇七一年）以降の宋—高麗仏教の連関や海商を介した両地仏僧の相互交流について多少付言したい。その存在の大きさからか、義天（自身の一〇八五年の入宋と、帰国後の仏書相互送致等も含めた通交）を巡る議論が盛んな反面、義天入宋の前史や、下つて十二世紀以降の展開への関心は比較的薄いように筆者には思われる〔1〕。だが、義天に先行した入宋僧曇真に着目し、開封での禅僧との交流（や義天との関係）について論じた〔鄭修芽 一九九四〕や、高麗禅僧坦然の宋阿育王山介誼への海商を通じた間接的師事（後者↓前者への書を通じた印可もあつたという）の史料を示した〔趙明濟 二〇〇三〕等の参照すべき研究もある。義天その人や義天版に直接かかわる範囲内の考察にとどめず、国外との接触を開始した高麗仏教界の主体的意思や、それを可能にする背景（例えば正規の麗宋国交に裏づけられた仏教交渉の安定的推進、また宋の国政における仏教の比重の相対的低下等）について、東アジア世界の再々編期を含む十二世紀以降も視野に入れたうえで検討し、日本の對外姿勢との比較を進めていく必要がある。

### 2 遼—日本の接点を巡る近年の研究

高麗統藏經において重要なのは、遼仏書の開板刊行を通じて日本—遼仏教の接点を作つた点である。上川通夫氏は、仏像・修法の国内での独自創案にまで行き着く白河院政期の密

教重視策においては、高麗義天版を通じての遼仏教の移入。参照に加え、白河院が僧侶を直接遼に派遣し仏書輸入に当たっていたと推測する。即ち、大宰権帥藤原伊房が海商を派遣し遼と通交して処罰された事件において、商船に便乗し一〇九一年渡遼した商人僧明範を、『覚禪鈔』『如法愛染王法』所引文書に見える、白河院近臣僧範俊と繋がりを持つ僧明範だと推定したのである〔上川 二〇〇六b・二〇〇八c〕。他方、伊房や渡遼を補佐したと思われる対馬守藤原敦輔と撰関家との血縁や社会的紐帯を重視し、同事件の処罰を通じて撰関家の国際的性格を白河院側が吸収再編したと見る保立道久氏の見解もある〔保立 二〇〇四c〕。史上唯一の入遼僧明範については、「横内裕人 二〇一〇」の推測する南都僧との関係性（興福寺円憲と対馬守敦輔との血縁が指摘されている）をも含め、今後より具体的な議論進展が期待される。

#### 六 平安時代の世界観と自国意識——渡海僧の役割

##### 1 三国世界観について

退嬰的で消極的とされた遣唐使廃絶後の対外姿勢については見直しが進んでいる。十世紀政府の積極的孤立主義に基づく対外政策を論じる石上英一氏の説〔石上 一九八二〕、異国牒状への国家的対応を再検討し、十・十一世紀に見られる、東アジア情勢の的確な理解に基づく政策的判断を論じる渡邊誠氏の研究〔渡邊 二〇〇七〕が注目される。

為政者の客観的な国際情勢判断が存在する一方で、仏教的な時空間認識・世界観が出現し、進展していくのも平安時代

の特徴であろう。所謂三国世界観である〔高木豊 一九八二〕。既に安然の『教時評』（九世紀末）に三国に対する自覚的認識がナシヨナリズムを伴って確認されるが〔末木文美士 一九九五〕、十世紀後半以降、日延や齋然を通じて呉越国〔12〕や北宋の仏教事業に接し、インド—中国の延長線上に自国を位置づける認識が為政者側によって改めて採用されたとする見解もある〔上川通夫 二〇〇〇〕。以下では、そのような前史を経て、三国の時空間認識が社会的に定着をみる〔今昔物語集〕・『扶桑略記』等参照〕とされる十二世紀について、前章までに紹介した論点と関わる問題に触れたい。

齋然請来の清涼寺釈迦如来像（釈迦在世時、優曇王により造立され、インド—中国と伝来した像の模像）は、ほぼ例外なく三国思想との関連で論じられる。同像は請来直後からそれなりの信仰を集めてはおり、「天竺・震旦・日本の三国に伝通してきた仏法を体現」するもの〔市川浩史 一九九九〕であるが、十二世紀以降世間に再浮上してくる〔村井章介 一九八七〕。周知のように模像たることが否定され、生身像そのものとの言説が誕生し〔『宝物集』巻一〕、同像を介して、釈迦生存時の天竺への時空を超えた直結が可能となる。なお、後白河院による同像への意識的接近（一一九一年に歴代天皇としてはじめて礼拝）も指摘されている〔上川通夫 二〇〇七b〕〔13〕。

さらに、震旦（中国）観に対する横内裕人氏の見解も重要である。先述の統藏経の国内受容過程において、遼・高麗要素を（作者を遼僧から「唐」僧に仮託する等して）意図的に

消去し、「中国(唐) 仏教」へ同化・吸収する十二世紀後半以降の動向を踏まえ、「現実の国家間関係と仏教世界観(本朝—震旦)の乖離は進む」とする「横内 二〇〇八a」。

前掲の「渡邊誠 二〇〇七」は、「森公章 一九九八」を受け、十二世紀以降、年紀制等の対外交渉管理体制の終焉(北宋滅亡等東アジア世界情勢が影響した可能性があるとす)と並行して王権・国家が対外関係から距離を置くようになり、独善的な対外認識・自国意識が肥大化して行くとする。仏教的天竺・震旦観についても、静的で変化なきものとして、同様に十二世紀の東アジア世界の再々編や国家・王権の対外姿勢を視野に入れつつ、現実の世界認識と乖離し觀念化していく過程やその推進主体・受容層等を究明していく必要があると思われる。さらにまた、同時期に再開される入宋僧を通じて現表面での中国仏教への接触・移入姿勢(後述)とどう整合的に理解しうるか、という点にも留意せねばなるまい。

## 2 独善的な自国意識の形成・展開と入宋僧

渡海僧侶は、自らの帰国や日記の送致等を通じ、客観的な海外情報を齎す存在とされる。「横内二〇〇八b」。他方、あまり注目されないが、自身の言動を通じて、観念的な世界観の形成・展開や、独善的な対外意識・自国意識の充足に寄与する側面もあると思われる。

成尋は日記とは別に、宇治大納言として知られる源隆国に宛てて書状を送っていたようだ(この書状については「石

井正敏 二〇〇七」に詳しい。抄出のみ伝来し全文は見られない)。これを受けた隆国の成尋宛返状には、成尋が祈雨の修法を成功させ皇帝の歡感至って大師号を賜ったことを称賛している(『朝野群載』卷二十所収)。ここで、『參天台五臺山記』の記事に当たると、修法成功や皇帝の歡感を確認できるものの、王麗萍氏が指摘するように、大師号は朝辞に際して出され、祈雨の褒賞として大師号が下賜されたとは読み取れない(『王麗萍 二〇〇二』)。成尋書状の文章排列・構成において、意識的にせよ無意識的にせよ、後援者層と共有する自国意識(対中華対等・優越意識)に沿うような傾向があったのかもしれない。また、後代、入南宋僧重源が、実際には金の版図にはいり到達しえなくなつたと自ら認めていた五臺山について、別の機会には參詣経験有りとの虚言を述べた(『谷口耕生 二〇〇六』)のも同根の問題と思われる。その発言が求められた場(東大寺大仏再建過程における大仏への仏舍利奉納時)との関連性も含めて考えるべきものである。入宋僧による(意図的な、あるいは思い込み等による無意識的な)在外体験情報の操作や、渡海経験者だからこそなすうる虚構の創出といった役回りも重要な検討課題である。

## 七 おわりに—僧侶の入宋再開を巡って

十一世紀末以来絶えていた僧侶の入宋が、一一六七年の重源(翌年宋西も入宋)より再開する。榎本涉氏、横内裕人氏は、この年、日本からの遣使が明州に到って仏法の大意を問うた『仏祖統紀』卷四七の記事に着目する。「榎本 二〇〇

〔六〕は遣使主体を大宰大式平頼盛とし、使いを僧（重源その人）とする。そして一一七二年以降の後白河法皇・平清盛と明州との通交に繋がる予備交渉がここになされたと推測する。〔横内 二〇〇八b〕は中国仏教情報・知識への意欲の高まりによる現状視察がなされたとする。同論では、後統の榮西、覚阿（一一七一年入宋、一一七四年帰国）をも梶野に、従来榮西（や能忍）の個人的動きとされてきた禪宗の日本導入について、後白河法皇による政策的導入計画があったとする（覚阿の師事した杭州靈隱寺の住持惠遠と後白河院等との書状を介した通交に着目する）。

重源・榮西以後、日本僧が続々と渡海して求法・勸進を行うようになるが、その初発段階に、王権の積極的意思・関与を想定する新たな見解である。僧侶の往来が北宋代のような国際問題に発展せず、自由な在宋活動をなしうることや、日本の支配層が直接に南宋寺院へ関与しうることの確認もまた、両氏のいう事前交渉や現状視察の中身に含まれるのではなからうか〔14〕。後白河院の対外的活動については、阿育王山舍利殿への木材寄進という具体的事例も明らかにされる〔藤田明良 二〇〇〇〕。勸進僧重源の側からの院への働きかけが重視されているが、院側が中国江南仏教へ積極的に接近・関与するメリットや、その動向と既存の顕密仏教界との折り合いが如何にはかられていったかをも今後追究するべきであろう。

もとよりそれは、鎌倉期以降の、所謂禅律仏教の展開と結びつけて検討するべきものであり、本稿の対象範囲を超える

ものとなる。最近の研究では、顕密体制論による禅律仏教の位置づけ（顕密仏教改革派に位置づけられる）が批判され、〔禅律教〕十宗観に立脚した、顕密仏教に対峙する新たな枠組みを持つ禅律仏教（宋風仏教）が鎌倉期に確立していたとされる〔大塚紀弘 二〇〇九〕。このような研究状況も踏まえつつ、その前史、即ち、江南仏教への接触・移入開始期（や遡って本稿の触れた平安期）から禅律仏教が社会的に定着するまでの過程について、豊富な研究史を整理しつつ検討することを次なる課題としたい。

## 注

- (1) 近年様々な観点から問題点が議論され再検討が進む。さしあたり、「山内晋次 一九九八」・「李成市 二〇〇〇・二〇〇八」・「金子修一 二〇〇六」・「廣瀬 憲雄 二〇〇八」等を参照。
- (2) 國王錢弘俶が天下兵馬都元帥の名で制作し、版図内に配布した八万四千の宝篋印塔が日延等を介して日本に伝来したことも著名な事例である〔西岡 一九八四 a〕。
- (3) 石井正敏氏は、渡海僧等の日記・報告に対する真偽の諮問は、正確な海外情報の手をはかるべくなされたとする〔石井 一九九六・二〇〇三〕。従うべき見解であろう。
- (4) 〔荒木計子 一九八〇〕・〔木宮之彦 一九八三〕・〔西岡虎之助 一九八四c〕等が齟齬に關する基礎的

史料を網羅しておりまず参照される。また、近年までの裔然や清涼寺釈迦如来像等の関連研究を一覧とした「川添昭一・森哲也 二〇〇九」がある。

(5) なお、版本大藏經下賜の前史となる古代の大藏經輸入や、それが外交・内政両面で果たした役割については「山下有美 一九九九」・「上川通夫 二〇〇八a」で議論される。

(6) なお、日本(裔然)や高麗が版本大藏經・新訳経典とともに太宗御製の仏書(『廻文偈頌』・「秘藏註」・「逍遙詠」等)を下賜された点も興味深い(宋皇帝の御製についてはさしあたり「江上綏・小林宏光 一九九四」・「佐藤成順 二〇〇九」参照。大藏經に編入もされていく御製については、前代までの類似例(例えば唐代玄宗の御注金剛般若經)との性格比較をも踏まえ、併せ考えるべき問題であろう。

(7) 当該期、対外交渉権を掌る天皇の許可なしには国人の出国は法制上不可能であった。所謂渡海禁制については、さしあたり近年の「渡邊誠 二〇〇九」を参照された。

(8) 寂照に関する説話群とそこに伺える対中華劣等意識、優越意識については「森正人 一九八二」を参照された。

(9) 関連研究は膨大な量にのぼる。さしあたり、井上泰也氏の研究史整理を参照されたい[井上 二〇〇二・二〇〇四・二〇〇八]。

(10) なお、義天の宋仏教との通交を支える海商のネットワークについては「原美和子 一九九九・二〇〇六」に詳しい。

(11) 筆者には統藏經・義天版を巡る史的・教学的諸問題や当該期の高麗仏教全般について先行諸研究を網羅的に踏まえて論じる能力も準備もない。近年までの国内外の高麗仏教関連研究を網羅した「佐藤厚・金天鶴 二〇〇〇」や「藤能成 二〇〇五・〇六」があるので参照されたい。

(12) 吉村稔子氏は、三国世界観と密接に関わる末法思想について、日延の渡海を通じて吳越國の末法思想の流行に接し、日本にも末法という時代認識が共有されたとする[吉村 二〇〇六]。

(13) なお、しばらく伏流していた、五臺山巡礼・文殊菩薩像請来も含む裔然の事績そのものが後白河院政期に再評価される[小島裕子 二〇〇四]ことにも注意しておきたい。

(14) そこで確認された南宋の仏教については、以下のような可能性を想定しておきたい。即ち、北宋の神宗—王安石改革期(仏教面では訳経事業の事実上の終了や空名度牒・紫衣・師号の販売開始等が想起される)、徽宗朝の仏教抑制政策(「小島毅 二〇〇七」)によれば王権が上に立ち儒仏道三教を二元的に統轄する政策、そして南渡を経て、制度・信仰面では社会に根づく反面、國政上に占める位置・役割は縮小していた

ものではなかったか。

文献リスト

荒木計子一九八〇「入宋僧裔然と清涼寺建立の諸問題(上)

(下)『学苑』四九一・四九二

石井正敏一九九三「入宋巡礼僧」荒野泰典他編『自意識と

相互理解 アジアのなかの日本史V』東京大学出版会

一九九六「入宋僧成尋のことなど」『古文書研究』

四三

二〇〇三『東アジア世界と古代の日本』山川出版

社

二〇〇七「源隆国宛成尋書状について」『中央史

学』三〇

石上英一九八二「日本古代一〇世紀の外交」井上光貞他

編『東アジアの変貌と日本律令国家 東アジア世界に

おける日本古代史講座七』学生社

市川浩史一九九九「日本中世前夜の「内なる三国」の思

想」『日本中世の光と影—「内なる三国」の思想』ベ

りかん社

井上泰也二〇〇二「成尋の『日記』を読む—『参天台五台

山記』の金銭出納—」『立命館文学』五七七

二〇〇四「続・成尋の『日記』を読む—『参天台

五台山記』の人物群像—」『立命館文学』五八四

二〇〇八「続々・成尋の『日記』を読む—『参天

台五台山記』に見える宋代の日常性—」『立命館文学』

六〇八

岩崎日出男二〇〇三「不空三蔵の五臺山文殊信仰の宣布に

ついて」『密教文化』一八一

宇都宮啓吾二〇〇二「十二世紀における義天版の書写とそ

の伝持について—訓点資料を手懸かりとした諸宗交流

の問題—」『南都仏教』八一

榎本 渉二〇〇六「明州に来た平家の使僧」小島毅編『義

経から—豊へ—大河ドラマを海域にひらく—』勉誠出版

二〇〇七a「研究の現状と問題関心」『東アジア

海域と日中交流 九—一四世紀』吉川弘文館

二〇〇七b「新羅海商と唐海商—佐藤信他編『前

近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社

二〇〇八「板渡の墨蹟」から見た日宋交流」『東

京大学日本史学研究室紀要』一一二

江上綏・小林宏光一九九四「南禅寺所蔵『秘藏詮』の木版

画』山川出版社

遠藤隆俊二〇〇二「宋代中国のパスポート—日本僧成尋の

巡礼—」『史学研究』二二七

二〇〇六「成尋と義天—11世紀東アジアの国際環

境と入宋僧—」『文献資料学の新たな可能性』大阪市

立大学東洋史研究室

王 勇二〇〇〇「遣唐使廃止後の海外渡航の物証—道賢

をめぐる人間関係を中心として—」『アジア遊学』二

二

王 麗萍二〇〇二「成尋と宋の神宗皇帝」『宋代の中日交

## 流史研究』勉誠出版

大塚紀弘二〇〇九「中世」『禅律』仏教と『禅教律』十宗

観』『中世禅律仏教論』山川出版社、初出二〇〇三

二〇一〇「宋版一切経の輸入と受容」『鎌倉遺文

研究』二五

小笠原宣秀一九四〇「察南小五臺山攷」『龍谷史壇』二四・

二五

奥 健夫二〇〇九「清涼寺釈迦如来像 日本的美術五」

三』至文堂

小野勝年一九七三「戒覚の『渡宋記』」『龍谷大学論集』四

〇〇・四〇一

小幡みちる二〇〇三「唐代の国際秩序と道教—朝鮮諸國へ

の道教公伝を中心として—」『史滴』二二五

金井徳幸一九七四「唐末五代五台山仏教の神異的展開—海

難救済信仰への推移と新羅の役割—」『社会文化史学』

一—

金子修二二〇〇六「東アジア世界論と冊封体制論」田中良

之他編『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・ア

イデンティティー—すいれん舎

上川通夫二〇〇〇「末法思想と中世の『日本国』—歴史学

研究会編『再生する終末思想』青木書店

二〇〇六 a 「日本中世仏教の成立」『日本史研究』

五二二

二〇〇六 b 「平安期の仏教と対外関係」『歴史評

論』六八〇

二〇〇七 a 「顕密主義仏教への基本視角」『日本

中世仏教形成史論』校倉書房、初出一九九七

二〇〇七 b 「中世仏教と『日本国』」『同右』、初

出二〇〇一

二〇〇七 c 「隋然入宋の歴史的意義」『同右』、初

出二〇〇二

二〇〇八 a 「一切経と古代の仏教」『日本中世仏

教史料論』吉川弘文館、初出一九九八

二〇〇八 b 「一切経と中世の仏教」『同右』、初出

一九九九

二〇〇八 c 「東密六字経法の成立」『同右』、初出

二〇〇五

河上麻由子二〇〇八 a 「遣隋使と仏教」『日本歴史』七一七

二〇〇八 b 「中国南朝の対外関係において仏教が

果たした役割について—南海諸國が奉つた上表文の検

討を中心に—」『史学雑誌』一一七—一二

二〇一〇「聖武・孝謙・称徳朝における仏教の政

治的意義—鑑真的招請と天皇への授戒からみた—」

『九州史学』一五五

川添昭二一九八七「鎌倉中期の対外関係と博多」『九州史

学』八八・八九・九〇

一九八八「鎌倉初期の対外関係と博多」箭内健次

編『鎖国日本と国際交流上』吉川弘文館

川添昭二・森哲也二〇〇九「齋然・清涼寺・清涼寺式釈迦

像関係文献目録」『年報太宰府学』三

- 衣川 強二〇〇五—〇九『参天台五臺山記』訳註稿(1)  
 5(5)『京都橘女子大学研究紀要』三二・『京都橘  
 大学研究紀要』三二—三五
- 木宮泰彦一九五五『日華文化交流史』富山房
- 木宮之彦一九八三『入宋僧齋然の研究』主としてその隨身  
 品と將來品』鹿島出版会
- 久曾神昇一九五九『三河入道寂照の研究』愛知大学総合  
 郷土研究所紀要』五
- 黒田俊雄一九七五『日本中世の国家と宗教』岩波書店
- 河内春人二〇〇四『新唐書』日本伝の成立』『東洋学報』  
 八六一—
- 小島 毅二〇〇七『唐宋の交革』溝口雄三他編『中国思想  
 史』東京大学出版会
- 小島裕子二〇〇四『五台山憧憬—追想、入宋僧齋然の聖地  
 化構想—』朝枝善照先生華甲記念論文集刊行会編『仏  
 教と人間社会の研究』永田文昌堂
- 齊藤圓真一九九七・二〇〇六・二〇一〇『参天台五臺山記  
 1—3』山喜房仏書林
- 佐伯有清一九九二『唐と日本の仏教交流—入唐巡礼僧と来  
 日伝法僧—』池田温編『唐と日本 古代を考える』吉川  
 弘文館
- 佐藤厚・金天鶴 二〇〇〇『高麗時代の仏教に対する研  
 究』『韓国仏教学 SEMINAR』八
- 佐藤成順二〇〇九『北宋真宗の御製仏書とその成立に携つ  
 た沙門と官人—皇帝をめぐる仏教の動向—』『三康文  
 化研究所年報』四〇
- 末木文美士一九九五『教時諍』と『教時諍論』『平安初  
 期仏教思想の研究—安然の思想形成を中心として—』  
 春秋社
- 平 雅行二〇〇六『シンポジウム「中世仏教の国際環境」  
 に寄せて』『日本史研究』五二四
- 高木 豊一九八二『鎌倉仏教における歴史の構想』『鎌倉  
 仏教史研究』岩波書店、初出一九七六
- 竹内理三一九五五『入吳越僧日延伝』『日本歴史』八  
 二
- 田中史生二〇〇六a『唐人の対日交易—高野雜筆集』下  
 巻所収『唐人書簡』の分析から』『経済系』三二九
- 二〇〇六b『慧萼の入唐求法と東アジアの仏教交  
 流』『진학100주년기념 학술대회—장보고 선단(船  
 回)과 해양불교—』東国大学仏教文化研究院
- 二〇〇七『江南の新羅人交易者と日本』佐藤信他  
 編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社
- 二〇〇九『円仁と惠萼—二人の入唐僧が見た転換  
 期の東アジア—』鈴木靖民編『円仁とその時代』高志  
 書院
- 谷口耕生二〇〇六『重源の文殊信仰と東大寺復興』『大勸  
 進重源—東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出—』奈良  
 国立博物館
- 笠沙雅章二〇〇〇『宋代における東アジア仏教の交流』  
 『宋元仏教文化史研究』汲古書院、初出一九八七

趙 明濟二〇〇三「臨濟宗をめぐる高麗と宋の交流」『駒

塚大学仏教学部論集』三四

塚本俊孝一九七五「宋初の仏教と齋然」『浄土宗史・美術

篇 塚本善隆著作集七』大東出版社、初出一九五四

中田美絵二〇〇九「五臺山文殊信仰と王権—唐朝代宗期に

おける金閣寺修築の分析を通じて—」『東方学』一一

七

中村菊之進一九七七「宋伝法院訳経三藏惟浄の伝記及び年

譜」『文化』四一一・一二

西尾賢隆二〇〇二「板渡の墨蹟」『禅文化研究所紀要』二

六

二〇〇六「中国仏教史における禅宗への推移」

『中国近世における国家と禅宗』思文閣出版、初出一

九八七

西岡虎之助一九八四 a 「日本と呉越との交通」『文化史の

研究 I 西岡虎之助著作集三』三一書房、初出一九二

三

一九八四 b 「入宋僧寂照についての研究」『同

右』、初出一九二三

一九八四 c 「齋然の入宋について」『同右』、初出

一九二五

西嶋定生一九八三 a 「東アジア世界と冊封体制—六—八世

紀の東アジア—」『中国古代国家と東アジア世界』東

京大学出版会、初出一九六二

一九八三 b 「序説—東アジア世界の形成—」『同

右』、初出一九七〇

橋本義彦一九九六「渡宋記—密航僧戒寛の日記—」『平

安の宮廷と貴族』吉川弘文館、初出一九九二

林 淳一九九五「日本仏教の位置—比較宗教学史の構想

—」日本仏教研究会編『アジアの中の日本仏教 日本

の仏教二』法蔵館

原美和子一九九九「宋代東アジアにおける海商の仲間関係

と情報網」『歴史評論』五九二

二〇〇六「宋代海商に関する一試論—小野正敏他

編『中世の対外交流 場・ひと・技術』高志書院

日野開三郎一九八四「唐・五代東亜諸国民の海上発展と仏

教」『北東アジア国際交流史の研究上 日野開三郎東

洋史学論集九』三一書房、初出一九六二・一九六四

平林盛得二〇〇一 a 「慶滋保胤の死—三河入道寂照の入宋

に関連して—」『慶滋保胤と浄土思想』吉川弘文館、

初出一九六五

二〇〇一 b 「大陸渡来の往生伝と慶滋保胤」『同

右』、初出一九八〇

二〇〇一 c 「慶滋保胤の出家前後の諸問題」『同

右』

廣瀬憲雄二〇〇八「古代東アジア地域対外関係の研究動向

—」『冊封体制』論・『東アジア世界』論と『東夷の小

帝国』論を中心に—」『歴史の理論と教育』一一九・

一三〇

藤 能成二〇〇五—〇六「高麗仏教研究文献目録（1）

(2)「仏教文化」一四・一五

藤田明良二〇〇〇「南都の「唐人」」『奈良歴史研究』五四  
藤善真澄一九七五「隋唐仏教時代区分試論―度僧制と貢奉  
制―」『東洋学術研究』一四一三

一九九六「不帰の客」中西進他編「人物 日中文  
化交流史叢書10」大修館書店

二〇〇六 a 「成尋と楊文公談苑」『参天台五臺山

記の研究』関西大学出版部、初出一九八一

二〇〇六 b 「宋朝訳経始末攷」『同右』、初出一九

八六

二〇〇六 c 「入宋僧と蘇州仏教」『同右』、初出二

〇〇一

二〇〇六 d 「宋朝の賁礼―成尋の朝見をめぐるつて

―」『同右』、初出二〇〇三

二〇〇七「参天台五臺山記 上」関西大学出版部

保立道久二〇〇四 a 「黄金国家」青木書店

二〇〇四 b 「平安時代の国際意識」『歴史学をみ

つめ直す 封建制概念の放棄』校倉書房、初出一九九

七

二〇〇四 c 「院政期の国際関係と東アジア仏教史

―上川通夫・横内裕人両氏の仕事にふれて―」『同右』

堀池春峰一九八〇「高麗版輸入の―様相と観世音寺」『南

都仏教史の研究上』法蔵館、初出一九五七

牧野和夫二〇〇九「齋然将来蜀版大蔵経の刊記・印造記に  
ついて」『実践女子大学文学部紀要』五一

牧田諦亮一九七六「民衆の仏教 アジア仏教史中国編Ⅱ」

校正出版社

一九八四「智識の巡礼聖跡故留後記について」

『中国仏教史研究第二』大東出版社、初出一九七五

村井章介一九八七「中世における東アジア諸地域との交

通」朝尾直弘他編『列島内外の交通と国家 日本の社

会史Ⅰ』岩波書店

桃 裕行一九九〇「日延の天台教籍の送致」『暦法の研究

(下) 桃裕行著作集Ⅷ』思文閣出版、初出一九六八

森 克己一九七五「日宋交通と日宋相互認識の発展」『増

補日宋文化交流の諸問題』国書刊行会、初出一九三七

二〇〇九「戒覚の渡宋記について」『続日宋貿易

の研究 新編森克己著作集Ⅱ』勉誠出版、初出一九七

二

森 公章一九九八「平安貴族の国際認識についての一考察

―日本中心主義的立場の「定立」―」『古代日本の対

外認識と通交』吉川弘文館

二〇〇九「遣唐使の特質と平安中・後期の日中関

係に関する文献学的研究」平成19年度〜平成20年度科

学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書

森 正人一九八一「対中華意識の説話―寂照・大江定基の

場合―」『伝承文学研究』二一五

山内晋次一九九八「日本古代史研究からみた東アジア世界

論―西嶋定生氏の東アジア世界論を中心に―」『新し

い歴史学のために』二三〇・二三一

二〇〇三「平安期日本の対外交流と中国海商」

『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、初出二〇〇一

山崎寛士二〇〇一「吳越国王と「真王」概念—五代十国の

中華秩序—」『歴史学研究』七五二

二〇〇二「未完の海上国家—吳越国の試み—」

『古代文化』五四—二

二〇〇七「九世紀における東アジア海域と海商」

『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』五八

山下有美一九九九「日本古代国家における一切経と対外意

識—」『歴史評論』五八六

山本謙治一九九一「五台山における聖地信仰の形成—仏教

聖地形成の一例として—」『人文科学』一一

横内裕人二〇〇八 a 「高麗統藏経と中世日本—院政期の東

アジア世界観—」（『日本中世の仏教と東アジア』稿書

房、初出二〇〇二

二〇〇八 b 「自己認識としての顕密体制と「東ア

ジア」—」『同右』、初出二〇〇六

二〇〇八 c 「遼・高麗と日本仏教—研究史をめぐ

って—」『東アジアの古代文化』一三六

二〇一〇「東アジアのなかの南都仏教—日本仏教

の肥沃の大地』『文学』一一—

吉村稔子二〇〇六「三千院蔵阿彌陀聖衆来迎図考—来迎図

の成立に関する一考察—」『美術史』一六一

李 成市二〇〇〇『東アジア文化圏の形成』山川出版社

二〇〇八「古代東アジア世界論再考—地域文化圏

の形成を中心に—」『歴史評論』六九七

渡邊 誠二〇〇七「平安貴族の対外意識と異国膜状問題—

『歴史学研究』八二三

二〇〇九「日本古代の対外交易および渡海制につ

いて—」『東アジア世界史研究センター年報』三

中国語

顧 吉辰一九九三『宋代仏教史稿』中州古籍出版社

河上麻由子二〇〇六「仏教と朝貢の關係—以南北朝時期為

中心—」『伝統中国研究集刊』一

黄 敏枝一九八九「宋代的紫衣師号—」『宋代仏教社会経済

史論集』台湾学生書局

孫 昌盛一九九七「西夏方塔塔心柱漢文題記考釈—」『考古

与文物』一九九七—

王 丁二〇〇八「初論《開宝蔵》向西域的流伝—西域出

土印本漢文仏典研究（二）—」『仏教文献と文学』日台共

同ワークショップの記録—」『国際仏教学大学院大学學術

フロンティア実行委員会

王 麗萍二〇〇九『新校參天台五臺山記』上海古籍出版社

韓國語

鄭 修芽一九九四「慧照国師曇真斗、淨因髓—」李基白先

生古稀紀念韓國史學論叢刊行委員會編『韓國史學論叢

上古代篇・高麗時代篇』一潮閣